

学 位 論 文 要 旨

氏 名 渡 邊 信 隆

題 目 教師の子ども認知の変容に関する研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

1. 研究の目的と方法

教師の子ども認知は子どもの学校適応を規定するものであり、ゆえに教師の認知枠組みは多様で柔軟であることが求められる。一方で教師の子ども認知の多様性は教師自身の教育観に基づくものであるため、変容しにくい。本研究では、教師の子ども認知の変容を促す契機として転機経験に着目し、認知変容と転機経験との関連を明らかにする。その上で、認知変容を促しうる実践的方策を検討することを目的とした。

2. 研究の概要

第1章では、教師の子ども認知の影響について検討した。先行研究から、教師の子ども認知は個々の子どものみならず担任する学級に対しても影響するものであり、多様性が求められることが示唆された。さらに、教師の子ども認知の変容を促す要因について検討し、教師自らの教育観等を問い直す省察を喚起させるものとして転機経験の重要性を指摘した。

第2章では、教師の子ども認知の変容を教師の成長に関する研究の観点から検討した。教師の力量を文脈・状況的なもの、あるいは明示化できないものとして捉えられるようになっていく中で、そのような力量を獲得するためには、既存の認知枠組み自体を再吟味し、再構成する意識的なプロセスを経ることが求められる。しかしながら、先行研究においてこれを教師の認知変容という心的プロセスから検討したものは見られなかった。また、教師の認知変容を促すためには転機経験が契機となりうるが、何らかの出来事が転機経験となるかどうかは教師によって異なることが指摘された。

第3章では、第2章の課題を受けて、転機経験に代わる方策を検討するため、成人学習におけるMezirow（2000）の変容的学習論に着目した。変容的学習論における「意味パースペクティブの変容プロセス」として教師の認知変容を考えると、認知変容を促すためには「混乱を引き起こすジレンマ」が必要であり、それは既知の知識と矛盾する情報が提示された状況や既存の経験とは異なる新たな経験したときだと考えられた。すなわち、指導の難しい子どもや対応の難しい状況に直面した時、既存の知識や経験、自身の教育観等に対して疑問を感じることでいえる。変容的学習論からも転機経験、すなわち、これまでの考え方や感じ方と矛盾する情報や経験に接する機会が、子ども認知の変容に必要であることが示唆された。

第4章では、教師の子ども認知の変容を促すための具体的方策を検討した。転機経験はいつでも、誰でも経験できるものではないため、転機経験を意図的に生み出す方策が必要であった。教師にとって、既知の知識と矛盾する情報が提示された状況や既存の経験とは異なる新たな経験を意図的に生み出すことができれば、それは転機経験に代わるものとなり得る。そこで、教師の子ども認知のアセスメント法の1つである教師用RCRTとポジティブ心理学における子どもの「ストレングス（強み）アプローチ」に着目した。

第5章の研究1では、まず、教職経験の違いによって教師の認知的複雑性や認知次元において差異が見られるかを、小学校教師を対象に検討した。その結果、教師の認知的複雑性は教職経験の長さに伴いは高まらないことが示された。また、認知的複雑性の高い教師の転機経験として、外的環境の変化や児童の背景を知ったことなどが挙げられた。異動などの外的環境の変化が引き起こす「ジレンマ」は教師にとっては影響が大きいことが示唆された。

研究2では、学級担任の子ども認知は、担任する学級成員が替われば、どの程度異なるのかを検討した。その結果、学級担任の主要な認知次元は、教師の教育観、指導観に影響されるものであり、学級成員が替わっても概ね同一であることが示唆された。第2に、指導が上手く行かない経験や苦勞する経験など、過去に直面したことがない経験によって、その経験を反映させた新たな認知次元を構成し、教師は認知枠組みを再構成させていく可能性が示された。

第6章（研究3、研究4）では、学級担任の子ども認知の変容に関する実践的研究を行った。転機経験の代わりとなる方策として、担任に対する教師用RCRTとストレングス・アプローチ（以下SA）を実施し、その効果を検討した。SAでは、教師の既存の知識を変容・抑制するための反証事例として、子どもの「強み（ストレングス）」情報を教師に提示した。対象は小学校と中学校の教師各1名であった。その結果、認知次元そのものの変容は見出すことはできなかったが、その下位次元であるコンストラクトの変容と個々の子どもに対する評価の変化が見い出され、この2つの方策が子ども認知の変容に有効である可能性が示された。

第7章では、教師用RCRTとSAの併用が教師の子ども認知の変容を促した機制について考察した。この方策が有効であったことから、教師の認知変容には「混乱を引き起こすジレンマ」をもたらして省察を促す契機と情報が必要であることが示唆される。本研究が行った教師用RCRTとSAの併用が、まさにその機能を担いうるものであると言え、それを意図的に行いうる実践的方策の必要性が示されたといえる。

3. 研究の成果

本研究の成果は2点である。第1に、教師の子ども認知の変容につながる省察を喚起させる転機経験の代わりとして、教師用RCRTとSAの併用は教育実践の現場において有効な方策として期待されることである。第2に、教師の子ども認知の変容には、葛藤を引き起こし、教師の認知枠組みと教育観を揺さぶり、省察を促す何らかの契機と情報が必要であることが分かった。それが転機経験として経験され、教師の成長が促されることが示されたことである。